# A-5　オリヤ語のコピュラ節に見られる、名詞句階層に関する制約

山部順治（ノートルダム清心女子大学）yamabe@post.ndsu.ac.jp

キーワード： 1. オリヤ語（印欧語、インド東部）；2. 統語論、類型論；3. 格、有生性、コピュラ文

**要旨**

本発表は、**オリヤ語におけるコピュラ節と名詞句階層の関係に関わる制約**として、3 点（ア）～（ウ）の一般化を行い、それらを引き起こしている文法的仕組みを説明する。（**コピュラ節の主語を S、補語を C** と記す。例文に関しては、オリヤ語の基本語順は日本語のそれと同じ。不適格性をもたらしている選択肢に*蛍光ペンを引く。登場人物、シャールク・カーン＝インドの人気俳優、以下、SRK と略す；モディ＝インド現首相）

（**ア**）　C は代名詞になれない。

シャールク・カーンは、今度の映画で、{一人の政治家／モディ／*彼／*私} になっている。

（**イ**）　S が感情的名詞句であれば、C の名詞は定になれない。感情的名詞句とは「（人名）のやつ」。

グヌのやつは、今度の劇で、{一人の政治家／*ガンディー} になっている。

（**ウ**）　コピュラ節が統語構造上の主語△を欠く補文（restructuring 補文）として埋め込まれた場合(a)、C の名詞は定になれない。なお、この制約は、△を含む補文(b)に関しては適用されない。

a.　監督は、SRK に、［今度の映画で {政治家／*モディ} になることを］許さなかった。

b.　監督は、SRK *i* に、［△*i* 今度の映画で {政治家／モディ} になることを］命じた。

3 点の制約は、ともに、名詞句階層で上位のものは C になりにくいという傾向に沿っている。一方で、3 者は、文法的な仕組みとしての性格が相違する。

## 1．背景と目的

オリヤ語のコピュラの主なものは、(1a) th-「～である be」と、(1b) he-「～になる become」。

(1)　a.　*mo maa*　*sikhyaka*　*th-il-e.*
my mother　teacher　be-PAST-3PL
私の母は、教師だった。

b.　*mo deha*　*thik*　*he-ich-i.*
my body　ok　become-PERF-3SG
私の体の具合は、よくなった。

本発表では、コピュラ節が、種々の構文文脈に置かれたときに、種々の名詞句を補語 C とする様子を調べたい。そのために重宝するのが、動詞 he-「なる」の、他人になりきること assumed identity を表す用法だ。これを使う。例えば(1)で、主語 S は役者、補語 C は役柄を表わす。例文(3)のように言い換えられる。

(2)　*saahrukh khaan*　*ethara-ra*　*philm-re*　*modi*　*he-ich-i.*
Shahrukh Khan　this.time-GEN　film-LOC　Modi　become-PERF-3SG
SRK は(NOM)、今度の映画でモディに(NOM) なっている。

(3)　*saahrukh khaan*　*ethara-ra*　*philm-re*　*modinka bhumikaa-re*　*abhinaya*　*kar-uch-i.*
Shahrukh Khan　this.time-GEN　film-LOC　Modi's　role-LOC　acting(N)　do-PROG-3SG
SRK は、今度の映画でモディ役で演技をしている。

例文(4)のように、役者と役柄の語順は入れ替え可能である。本発表では、例文を、基本と思われる語順［役者—役柄］のものに限定する。

(4) *se saantaaklas* *prakruta-re* *mu~* *he-ith-il-i.*
that SantaClaus nature-LOC me.NOM become-PERF-PAST-1SG
あのサンタクロースは(NOM)、ほんとは私が(NOM) なっていたのだ。

本発表は、これから次のように展開する。第２節では制約（ア）、第３節では制約（イ）を提示する。第４節では、コピュラ節で見られる制約（ア）（イ）と、二重目的格の節で見られる類似の制約を対比する。第５節は、制約（イ）と複文構造の相互関係を観察する。第６節では制約（ウ）を提示する。第７節でまとめる。

## ２．（ア） C は代名詞になれない

コピュラ節の C は、代名詞になることができない。例えば、(5)の「私」の文は、モディ首相が、俳優シャールク・カーンがモディ首相役で出演する映画を見ながら言うと想定したものだが、不適格である。

(5) *saahrukh khaan* *ethara-ra* *philm-re* { *jaNe raajanetaa* | *modi* | **mu~* | **tume* } *he-ich-i.*
Shahrukh Khan this.time-GEN film-LOC one politicia n Modi me.NOM you.NOM become-PERF-3SG
SRK は(NOM)、今回の映画で｛一人の政治家｜モディ｜*私｜*あなた｝に(NOM) なっている。

１・２人称代名詞だけでなく、(6)のように、３人称代名詞「彼」も排除される。その人物を指示するのには「その人」のように名詞「人」を添えればよい。オリヤ語の「彼 NOM」と「その」はほとんど同形である。

(6) *saahrukh khaan* *ethara-ra* *philm-re* { *se loka* | **se* } *he-ich-i.*
Shahrukh Khan this.time-GEN film-LOC that person he/she.NOM become-PERF-3SG
SRK は(NOM) 、今度の映画で｛その人｜*彼｝に(NOM) なっている。

制約（ア）の事象を起こしている文法的な仕組みは、(7)の①②のどちらか（あるいは両方）だ、と考えられる。（しかし、どちらが適切な分析であるか決定できる手掛かりを得られていない。）

(7) ① コピュラ節の C は、記述的な内容を含まなければならない。それを欠く表現、例えば、代名詞は不可。（意味的な制約）

② コピュラ節の C は、無標な（はだかの）主格でなければなければならない。有標な（屈折を具現する）主格であってはいかない。（形態音韻論的な制約）

人称代名詞の主格は、（下線で示すように）主格であることを積極的に標示する形であり、はだかではない。ゆえに②によってはじかれる。これに対し、人名を含め名詞は、主格の形ははだかなので、②の要求を満たす。

(8)

| | I(1SG) | you(2PL) | he/she(3SG) | Modi | one politician |
|---|---|---|---|---|---|
| NOM | *mu~* | *tume* | *se* | *modi* | *jaNe raajanetaa* |
| OBJ | *mo-te* | *tuma-ku* | *taa-ku* | *modi-ku* | *jaNe raajanetaa-ku* |
| GEN | *mo-ra* | *tuma-ra* | *taa-ra* | *modi-ra* | *jaNe raajanetaa-ra* |

人称代名詞のはだかの形は、たしかに存在はする。 (9a)のように、直後の名詞を修飾する働き、すなわち、属格形の代理、をする。しかし、これは、主格ではないので、(10)のようにコピュラ節の C になれない。

(9) a. { *mo* | *tuma* } (**nuaa*) *saaikel.*
my your new bike
｛私｜あなた｝の($\phi$)（*新しい）自転車

b. { *mo-ra* | *tuma-ra* } *nuaa* *saaikel.*
my-GEN your-GEN new bike
｛私｜あなた｝の(GEN) 新しい自転車

(10) *saahrukh khaan* *ethara-ra* *philm-re* { **mo* | **tuma* } *he-ich-i.*
Shahrukh Khan this.time-GEN film-LOC me. $\phi$ you. $\phi$ become-PERF-3SG
SRK は(NOM) 、今度の映画で｛*私｜*あなた｝に($\phi$) なっている。

## 3．（イ）　S が感情的名詞句であれば、C の名詞は定になれない

感情的名詞句とは、例えば、例文(11)(12)中の gunu-Taa である。形式的には、人名に類別詞接尾辞-Taa が付加したもの、意味は、「～のやつ」のように話者が名前の人を目下と捉えていることを表わす。

S が感情的名詞句であれば、C は定になれない。例えば、(11) 人名や、(12) 名詞句「その～」は排除される。

(11)　{ *gunu* | **gunu-Taa* }　*se Draamaa-re*　*gaandhi he-ich-i.*
Gunu　Gunu-CL　that drama-loc　Gandhi become-PERF-3SG

{グヌ｜*グヌのやつ} は(NOM) 、その劇でガンディーに(NOM) なっている。（グヌ＝人名）

(12)　{ *gunu* | **gunu-Taa* }　*Draamaa-re*　*se loka*　*he-ich-i.*
Gunu　Gunu-CL　drama-loc　that person　become-PERF-3SG

{グヌ｜*グヌのやつ} は(NOM) 、劇でその人に(NOM) なっている。

この条件下で、C は不定の名詞句「一人の～」にはなれる。

(13)　{ *gunu* | *gunu-Taa* }　*Draamaa-re*　*jaNe raajanetaa*　*he-ich-i.*
Gunu　Gunu-CL　drama-loc　one　politician　become-PERF-3SG

{グヌ｜グヌのやつ} は(NOM) 、劇で一人の政治家に(NOM) なっている。

## 4．コピュラ節と二重目的格の節を対比する

オリヤ語で、目的格標示の名詞句を２個含む節に関して、制約(14)が知られている（山部 2020 春)。

(14)　主語と非主語がともに目的格で標示されている節において、
非主語が主語より有生性階層において上位である場合、不適格性が生じる。
名詞句の有生性階層：　１・２人称　＞　人　＞　感情的名詞句「～のやつ」

制約(14)を(15)に例文で示す。ここでは、主語は斜格主語構文「～せざるをえない」の主語だという理由で、目的格になっている。目的語は、他動詞「教える」「給仕する」の目的語であるという理由で、目的格になっている。

(15)　a.　*saaran-ku*　*aaji*　{ *maaniku* |　**mo-te* |　**tuma-ku* }　*paDhe-ibaa paai~*　*paD-ib-a.*
sir-OBJ　today　Mani-OBJ　me-OBJ　you-OBJ　teach-INF　fall-FUT-3SG

先生は(OBJ)、今日 {マニ｜*僕｜*君} を(OBJ) 教えざるをえないだろう。（マニ＝人名）

b.　{ *gunu-ku* | **gunu-Taa-ku* }　*ethara*　*se saaran-ku*　*saarbh kar-ibaa paai~ paD-ib-a.*
Gunu-OBJ　Gunu-CL-OBJ　today　that sir-OBJ　serve　do-INF　fall-FUT-3SG

{グヌ｜*グヌのやつ} は(OBJ) 、このたびあの方を(OBJ) 給仕せざるをえないだろう。

例文(14a)では、名詞句の有生性階層の断片「１・２人称＞人」が問題となる。目的語は、主語の「先生」より上位のものすなわち１・２人称にはなれない。例文(b)では、同階層の断片「人＞感情的名詞句」が問題となる。主語は、目的語の「あの方」より下位である感情的名詞句にはなれない。

本発表の制約（ア）（イ）の組は、制約(14)と似ている。例文(16)の a,b は、それぞれ（ア）（イ）を示すものだが、例文(15)の a,b と並べて見ると、同じ種類の名詞句に蛍光ペンが引かれており、並行的に見える。

(16)　a.　*saahrukh khaan*　*ethara-ra*　*philm-re*　{ *jaNe raajanetaa* | *modi* | **mu~* |　**tume* }　*he-ich-i.*
Shahrukh Khan　this.time-GEN　film-LOC　one politician　Modi　me.NOM　you.NOM　become-PERF-3SG

SRK は(NOM) 、今度の映画で {一人の政治家｜モディ｜*私｜*あなた} に(NOM) なっている。

b.　{ *gunu* | **gunu-Taa* }　*se Draamaa-re*　*gaandhi*　*he-ich-i.*
Gunu　Gunu-CL　that drama-loc　Gandhi　become-PERF-3SG

{グヌ｜*グヌのやつ} は(NOM) 、その劇でガンディーに(NOM) なっている。

この節の以下で、(17)の２点を論じる。

(17)　制約（ア）は、文法的な仕組みとしては(14)とは別種である。

制約（イ）は、(14)と同種であり、(8)とともにより一般的な制約の別々の場合をなす。

すなわち、本発表の（ア）と（イ）は文法的には異なる性格のものである。

制約（ア）が文法的な仕組みとして制約(14)とは別種であることは、排除される名詞句の種類の範囲がズレている点から分かる。制約（ア）は、例文(6)や次の(18)に示したように、３人称の代名詞を許さない。つまり、１・２・３人称全ての人称代名詞を同類として括る。それに対して、(14)は、名詞句の有生性階層に表わされるように、また例文(19)に示されるように、１・２人称を括り、３人称の代名詞は除外する。

(18)　*saahrukh khaan*　*ethara-ra*　*philm-re*　{ *jaNe raajanetaa* | *modi* | ***mu~*** |　***tume*** }　*he-ich-i.*
Shahrukh Khan　this.time-GEN film-LOC　one politician　Modi　me.NOM　you.NOM　become-PERF-3SG

SRK は(NOM)、今回の映画で｛一人の政治家｜モディ｜*私｜*あなた｝に(NOM) なっている。

(19)　*saaran-ku*　*aaji*　{ *taa-ku*　|　***mo-te*** |　***tuma-ku*** }　*paDhe-ibaa paai~*　*paD-ib-a.*
sir-OBJ　today　he/she-OBJ　me-OBJ　you-OBJ　teach-INF　fall-FUT-3SG

先生は (OBJ) 、今日｛彼女｜*僕｜*君｝を (OBJ) 教えざるをえないだろう。

制約（イ）は、より一般的な制約（エ）の１つの場合（下線部の場合）をなす、と考えられる。意味と構文の相互関係に関わるものだ。条件①の場合(i)は、山部（2020 春）で論じられた部分に当たる。

**（エ）**　２項を含む節は、次の条件①②の両方に当てはまる場合には、不適格である。

①　主語と非主語が格形によって区別されない。すなわち、
(i)両項ともに目的格、または、(ii)ともに主格。

②　非主語が主語より有生性階層において上位である。
名詞句の有生性階層：　１・２人称　＞　人　＞　感情的名詞句「～のやつ」

制約（エ）には、次のような動機付けが指摘できる。②のような有標な状況を意味するためには、形式的に節中の２項が格形の違いで分別されなければならない。それ以外の場合には、標示の不在が許容される。

上述の考えを図示すると(20)のようだ。(エ) の作用域は　に当たり、(ア) の作用域は　に当たる。（エ）は、後者の領域でも働いているが、後者の領域に覆われてしまっていて働きが見えないのだ。

(20)

| （エ）の条件 ① ＼ ② | 非主語が１・２人称 | 主語が感情的名詞句 |
|---|---|---|
| 両項が目的格（二重目的格構文） | *(16a) | *(16b) |
| 両項が主格（コピュラ節） | *(5) | *(11,12) |

## ５．制約（イ）のつづきー　コピュラ節が従属節に埋め込まれるとき

コピュラ節が埋め込まれる従属節の種類を３種に分ける。第５節では(i)(ii)を、第６節では(ii)(iii)を対比する。

(21)

| | 従属節の名前 | 従属節が統語上の主語△を | コントローラ名詞句と従属節主語が |
|---|---|---|---|
| (i) | 非義務的制御の従属節 | 含む | 指示対象のみを共有する |
| (ii) | 義務的制御の補文 | 含む | 文法的特徴＋指示対象を共有する |
| (iii) | restructuring 補文 | 含まない | |

制約（イ）は、(22)(23)に示すように、(a) 義務的制御の補文では適用され、(b) 非義務的制御の補文では適用

されない。(22)は、コントローラ名詞句が目的格である場合、(23)は、コントローラ名詞句が主格である場合である。各構文の種類は、主節の述語「命じる」「選ぶ/呼ぶ」「たがる＝欲求する」「しようとする＝努力する」によって決定されている。

(22) a. *DaairekTar* { *maNTu-ku* | **maNTu-Taa-ku* } *ethara-ra Draamaa-re gaandhi he-baa paai~ kah-il-e.*
director Mantu-OBJ Mantu-CL-OBJ this.time-GEN drama-LOC Gandhi become-INF tell-PAST-3PL

監督は｛モントゥ｜*モントゥのやつ｝ *i* に(OBJ) ［△*i* 今度の劇でガンディーになるよう］命じた。

b. *DaairekTar* { *maNTu-ku* | *maNTu-Taa-ku* } *ethara-ra Draamaa-re gaandhi he-baa paai~ baach-il-e / Daak-i-le*
director Mantu-OBJ Mantu-CL-OBJ this.time-GEN drama-LOC Gandhi become-INF choose/invite-PAST-3PL

監督は｛モントゥ｜モントゥのやつ｝ *i* を(OBJ) ［△*i* 今度の劇でガンディーになるため］選んだ/ 呼んだ。

(23) a. { *maNTu* | **maNTu-Taa* } *ethara-ra Draamaa-re gaandhi hebaa paai~ icchaa ka-l-aa.*
Mantu Mantu-CL this.time-GEN drama-LOC Gandhi become-INF desire do-PAST-3SG

｛モントゥ｜*モントゥのやつ｝ *i* は(NOM) ［△*i* 今度の劇でガンディーになり］たがっていた。

b. { *maNTu* | *maNTu-Taa* } *ethara-ra Draamaa-re gaandhi hebaa paai~ ceSTaa ka-l-aa.*
Mantu Mantu-CL this.time-GEN drama-LOC Gandhi become-INF effort do-PAST-3SG

｛モントゥ｜モントゥのやつ｝ *i* は(NOM) ［△*i* 今度の映画でガンディーになろう］とした。

義務的制御の構文(a)、非義務的制御の構文(b)は、いずれも、統語構造的に、補文（［括弧内］）に主格の空代名詞△を含む。(a)ではそれが先行詞と同一アイテムだが、(b)では指示の同一性にとどまる。そのため、(a)では、先行詞が感情的名詞句だと、△もその感情的名詞句と見なされ、不適格性が生じる。(b)では、△はそれと同一人物と解されるにとどまるので、制約（イ）の適用を免れる。

例文(22)(23)の［a／b］の統語的構造が、それぞれ、［義務的／非義務的］制御であることを示しておく。次の例文(24)(25)の(a)は、主節の述語「命じる」などは、義務的制御のそれである。ここでは、コントローラと補文主語△がの同一指示は、必要である。したがって、同じことがらであっても、補文を対応する自動詞で表すことができない。これに対し、非義務的制御(b)においては、コントローラと補文要素の同一指示は、なくてもよい。したがって、同じことがらを表わすのに、補文の動詞を意味的に対応する自動詞に置き換えても構わない。

(24) a. *saar gunu-ku sighra e kaama* { *kar-ibaa paai~* | **he-baa paai~* } *kah-il-e.*
sir Gunu-OBJ fast this work do-INF happen-INF tell-PAST-3PL

先生はグヌ *i* に(OBJ) ［{△*i* 早くこの仕事をするように｜*この仕事がなされるように}］命じた。

b. *saar gunu-ku sighra e kaama* { *kar-ibaa paai~* | *he-baa paai~* } *Daak-il-e.*
sir Gunu-OBJ fast this work do-INF happen-INF tell-PAST-3PL

先生はグヌ *i* を(OBJ) ［{△*i* 早くこの仕事をするため｜この仕事がなされるため}］呼んだ。

(25) a. *pilaa-Ti aaji bhitare e kaama* { *kar-ibaa paai~* | **he-baa paai~* } *icchaa ka-l-aa.*
kid-CL today within this work do-INF happen-INF desire do-PAST-3SG

使用人 *i* は(NOM) ［{△*i* 今日中にこの仕事をし｜*この仕事がなされ}］たかった。

b. *pilaa-Ti aaji bhitare e kaama* { *kar-ibaa paai~* | *he-baa paai~* } *ceSTaa ka-l-aa.*
kid-CL today within this work do-INF happen-INF effort do-PAST-3SG

使用人 *i* は(NOM) ［{△*i* 今日中にこの仕事をするよう｜この仕事がなされるよう}］努力した。

両構造の相違は、統語的構造にあるのであって、表わされる動作の種類がそのまま反映したものではない。kah-「命じる」は、上の(22a)のように補文として不定詞を取ることもできるし、また、次の(26)のように定動詞（人称・数、時制、法を示す）を取ることもできる。不定詞の場合は、(24a)のように義務的制御の構文であって、(22a)のように制約（イ）に引っかかる。一方、定動詞の場合は、(27)のように非義務的制御の構文であって、(26)のように制約（イ）を免れる。

(26) *DaairekTar* { *maNTu-ku* | *maNTu-Taa-ku* } *ethara-ra* *Draamaa-re* *gaandhi* *he-b-a* *boli* *kah-il-e.*
director Mantu-OBJ Mantu-CL-OBJ this.time-GEN drama-LOC Gandhi become-FUT-3SG COMP tell-PAST-3PL

監督は｛モントゥ｜モントゥのやつ｝*i* に(OBJ) ［△*i* 今度の劇でガンディーになるよう（定動詞)］命じた。

(27) *saar* *gunu-ku* *sighra* *e* *kaama* { *kar-ib-a* | *he-b-a* } *boli* *kah-il-e.*
sir Gunu-OBJ fast this work do-FUT-3SG happen-FUT -3SG COMP tell-PAST-3PL

先生はグヌ *i* に(OBJ) ［{△*i* 早くこの仕事をするように｜この仕事がなされるように}（定動詞)］命じた。

## 6．（ウ） コピュラ節が restructuring 補文として埋め込まれた場合、C の名詞は定になれない

restructuring 補文（表(21)の(iii)）とは、統語上の主語を欠く補文のことだ（Wurmbrand 2001 など)。これと（本発表でいう）義務的制御の補文（同(ii)）は、従属節内に統語構造上の主語を［含まない(iii)／含む(ii)］という点で区別される。例文(28)(29)では、構造的にどちらであるかが、主節の述語「命じる」「許さない」「意欲が起こる」「せざるをえない」によって決定されている。制御補文の例は、次の(a)（および、(22a)(23a)の適格な文）であり、そこでは C の名詞は定になれる。それに対し、(b)の restructuring 補文では、C の名詞は定になれない。

(28) a. *DaairekTar saahrukh khaan-ku* *ethara-ra* *philm-re* { *buDhaa raajanetaa* | *modi* } *he-baa paai~* *kah-il-e.*
director Shahrukh Khan-OBJ this.time-GEN film-LOC aged politician Modi become-INF tell-PAST-3PL

監督は SRK に［△*i* (NOM) 今回の映画で｛年配の政治家｜モディ｝に(NOM) なるよう］命じた。

b. *DaairekTar saahrukh khaan-ku* *aau* *philm-re* { *buDhaa raajanetaa* | **modi* } *he-baa paai~* *de-l-e* *ni.*
director Shahrukh Khan-OBJ anymone film-LOC aged politician Modi become-INF give-PAST-3PL not

監督は SRK に ［× もう映画で｛年配の政治家｜*モディ｝に(NOM) なるのを］許さなかった。

(29) a. *saahrukh khaan-ku* *kintu* { *buDhaa raajanetaa* | *modi* } *he-baa paai~* *icchaa he-l-aa ni.*
Shahrukh Khan-OBJ however aged politician Modi become-INF desire happen-PAST-3PL not

SRK は、しかし、［△*i* (NOM) ｛年配の政治家｜モディ｝に(NOM) なり］たい気がしなかった。

b. *saahrukh khaan-ku* *teNu* { *buDhaa raajanetaa* | **modi* } *he-baa paai~* *paD-il-aa.*
Shahrukh Khan-OBJ therefore aged politician Modi become-INF fall-PAST-3PL

SRK は、それで［× ｛年配の政治家｜*モディ｝に(NOM) になら］ざるを得なかった。

なお、(28)(29)で、コントローラを感情句名詞句「シャールク・カーンのやつ」に置き換えても、適格性は（さらに可能性が狭まるわけではなく）パターンはそのままで変わらない。

これは、文法の仕組みとして(30)の①と②によると考えられる。コピュラ節に特徴的な、統語形態論的性質だ。

(30) ① S と C は、格に関して一致しなければならない。

② C は主格でなければならない。（このことは、(7)の②に含まれる）

ゆえに、S は主格でなければならない。

制御の補文(11)においては、△がある。これは、コピュラ節の S であり、かつ主格である。ゆえに、(30)の要求を満たす。それに対し、restructuring 補文においては、△がない。コントローラ名詞句をコピュラ節の S に相当すると見なしたとしても、その格は目的格である。ゆえに、要求を満たさない。

なお、(30)の①だけに従って、(31)のように C を S に合わせて目的格にすると、不適格である。

(31) b. *DaairekTar saahrukh khaan-ku* *aau* { **buDhaa raajanetaa-ku* | **modin-ku* } *he-baa paai~* *de-l-e* *ni.*
director Shahrukh Khan-OBJ anymone aged politician-obj Modi-obj become-INF give-PAST-3PL not

監督は SRK に(OBJ) ［× もう｛*年配の政治家｜*モディ｝に(OBJ) なるのを］許さなかった。

b. *saahrukh khaan-ku* *teNu* { **buDhaa raajanetaa-ku* | **modin-ku* } *he-baa paai~* *paD-il-aa.*
Shahrukh Khan-OBJ therefore aged politician-obj Modi-obj become-INF fall-PAST-3PL

SRK は(OBJ)、それで ［× ｛*年配の政治家｜*モディ｝に(OBJ) なら］ざるを得なかった。

制約（イ）と（ウ）に関して、人名「モディ」の替わりに、不定名詞句「一人の政治家」があれば、文は適格である。（イ）に関しては例文(13)。（ウ）に関しては例文(28b,29b)の適格な文。理由は(32)のようだと考える。

(32) ① 名詞句は、それが不定であれば、統語的に DP ではなく、NP までしか投射しない（Longobardi 1994）。

② 制約（イ）（ウ）は、DP のペアに関するものであり、２項の一方でも NP であれば関知しない。

したがって、コピュラ節の名詞句が不定であれば、それは制約（イ）（ウ）の影響を受けずにすむ。

例文(28)の［a／b］が、補文の統語的構造に関して、それぞれ、［制御／restructuring］であることを示しておく。（両構文の相違について、山部 2014, 2020, Yamabe 2020. ヒンディー語の対応構文について、 Butt 2014.）副詞的句「みんな一緒に」の「みんな」は、先行詞と格に関して一致する。(33a)「命じる」の文では、補文の主語△があり、これは主格なので、「みんな」はこれに一致して主格になれる。また、主節中にあるコントローラ pilaa maanan-ku「子どもたち OBJ」に一致して目的格にもなれる。一方、(33b)「許さない」の文では、「みんな」は主格になれない。補文には構造上の主語がなく、先行詞となる主格の名詞句を見い出せないからだ。

(33) a. *saar pilaa maanan-ku seThi { samasan-ku | samaste } ekaasangare bas-ibaa paai~ kah-il-e.*
sir kid PL-OBJ there all-OBJ all.NOM together sit.down-INF tell-PAST-3PL
先生は子どもたちに(OBJ) ［△*i*(NOM) そこに {みんな(OBJ) | (NOM)} 一緒に 座るよう］命じた。

b. *saar pilaa maanan-ku seThi { samasan-ku | *samaste } ekaasangare bas-ibaa paai~ de-l-e ni.*
sir kid PL-OBJ there all-OBJ all.NOM together sit.down-INF give-PAST-3PL not
先生は子どもたちに(OBJ) ［× そこに {みんな(OBJ) | *(NOM)} 一緒に 座るのを］許さなかった。

## 7．まとめ

３点の制約（ア）～（ウ）を対比すると表(34)のようだ。３点の制約は、ともに、名詞句階層で上位の名詞句は補語 C になりにくいという傾向に沿っている。一方、３者は、文法的な仕組みとしては性格が相違する。また、適用範囲は、互いに似ているがズレている。３者は、したがって、機能的あるいは認知的には共通の動機付けがあると予期されるものの、言語の仕組みとしては別々なものと見なすべきである。

(34)

| | 本発表での記述 | 文法的性質 | 補語 C として排除される名詞句 |
|---|---|---|---|
| **（ア）** | (7) | 形態音韻論？意味的？ | 代名詞 |
| **（イ）** | **（エ）** の１つの場合 | 統語論と意味の関係 | 定の人 |
| **（ウ）** | (30) | 統語論と形態論の関係 | 定の人 |

**記号** CL=classifier, FUT=future, GEN=genitive, INF=infinitive, LOC=locative, NOM=nominative, OBJ=objective, PL=plural, PAST=past, PERF=perfect, PROG=progressive, SG=singular, 1/2/3=1st/2nd/3rd person, $\phi$ =bare form.

**オリヤ語の発音** *a* [ ɔ ], *aa* [ a ], *D,L,T* = retroflex, ~= nasalization.

**参照文献**


山部順治（2014 春）「オリヤ語の複合述語にかかる人称制限」『日本言語学会大会予稿集』［以下、同］

_____（2015 秋）「オリヤ語における小さい複文— 2 種類の再構成（restructuring）—」

_____（2020 春）「オリヤ語における、類別詞付き名詞句に関わる格制約」

Butt, Miriam (2014) Control vs. complex predication: identifying non-finite complements. *NLLT* 32.165–190.

Longobardi, Giuseppe (1994) Reference and proper names: a theory of N-movement in syntax and logical form. *Linguistic Inquiry* 25, 609-65.

Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: Restructuring and clause structure.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Yamabe, Junji (2020) The person constraint in Odia. Tariq Khan, ed., *Queries in the structure of language*, 1-13. Mysuru: Central Institute of Indian Languages.